

日仏会館における「占いと説話」開催について

司会・コーディネーター 伊藤信博（名古屋大学）

東京の恵比寿にある日仏会館フランス事務所館長であるクリストフ・マルケ氏のご厚意により、説話文学会四月例会をこの度、日仏会館で開催することになりました。フランスでは、「説話」は、日本独特の文学であることが認知されています。また、古くはコレージュ・ド・フランスのベルナル・フランク氏が説話研究に先鞭をつけられたのを始め、フランス国立高等研究院（歴史）のフランシーヌ・エライユ氏など多くの研究者が『今昔物語集』を含めた説話研究を行っています。

元々「中国学」が盛んなフランスでは「易学」研究も隆盛を極めており、近年では、安倍清明を含めた日本の「陰陽道」研究から「占い」に注目が集まっています。四月例会に「占い」をテーマに選んだのも、このような「陰陽道」研究から発展した「占い」の思想、表象、文学についての最新研究を紹介していただきたいと考えたからです。そして、日本人研究者の発表も含め、様々な意見交換の中から、新たな国際共同研究の萌芽が生ずればと希望したからでもあります。

そこで、パリ・デイドロ大学のハイエク氏、フランス極東学院のダヴァン氏、日本からは成蹊大学の平野氏をお招きし、「占いと説話」に絡み、発表をお願いしました。さらに、『中世日本の予言書』などの著書があり、外国との国際共同研究を推進する立教大学名誉教授小峯氏にコメントータとして出席していただき、研究成果や今後の「説話文学」研究の新たな国際化についてもご意見をいただきたいと考えた次第です。

説話の中の占い師像の変貌—『安倍晴明記』とその周辺

マティアス・ハイエク氏（パリ・デイドロ大学）

「陰陽道ブーム」と呼ばれた現象が起こりもはや15年近く経った。今になってあれは何だったのだろうか、不思議に思ったりする。簡単に言えば、80年代から歴史学、宗教学、人類学の分野において、幾つかの研究者が行った「陰陽道」をめぐる画期的な研究の成果が、一部の作家の手により取れあげられた結果、「陰陽道」、「陰陽師」という用語が、小説、コミック、映画などのメディアを通してポップカルチャーに浸透してきたのである。

ところが、このような現象が、必ずしもポストモダンな出来事だけではなく、規模や時代背景が違って中世後期・近世初期において、それに類似した傾向が見られる。すなわち、平安時代以降から発展した、「安倍（清明）清明」やその他の占い師・術者を題材にした様々な伝承が、中世後期から御伽草子や物語として形成され、江戸時代には入るとそれらがさらに拡大していく傾向である。一方、知識の担い手が僧侶や公家から儒者へ変わっていく中、旧来の物語や説話の考証が進み、その新しい見解から清明やその他の占い師について、新たな言説・描写が現われた。

本発表では、それらの要素を考慮し『酒吞童子絵巻』、『熊野本地絵巻』、『長谷寺縁起絵巻』などの中世後期の物語や、近世初期の『篁篁抄』、『安倍晴明物語』に見られる様々な安倍清明や陰陽師、相人のイメージと、林羅山やその他の儒者・神道家によって再編成された占い師像を検討した上で、中世と近世との間のはざまに新たに形成された占い師の世界を考察する。

近世の占い人気と『一休ばなし』に読む民衆の禪的な知恵

ディディエ・ダヴァン氏（フランス国立極東学院東京支部）

合理主義から様々な信仰までに広がる近世の思想的風景を眺めると、それぞれの思想家を対象にした研究に基づいて「朱子学」、「国学」、「古学」等々のように特定された体系を前提で考える事が多いであろう。しかし、時代の活発な動きは知識人の間にだけあった訳ではない。教科書の分類になかなかフィットしない運動が勢いよく社会を動かした。占いの流行はその一例である。思想的な主張やはっきりした教義よりも、むしろ自然に湧いてきた観念と社会の需要に応じた理論を中心に普及していたと言える。それは、近世に始まった事ではなく、日本の宗教の周辺に常に潜んでいたものだが、江戸時代の社会や技術の進化に伴って、それまでになかった勢いで世に現れた。

一方、1668年に版行された『一休ばなし』にも、体系や既存のラベルを貼って説明できない何かが表されていると主張したい。『一休ばなし』は狭義でいう「説話」ではないが、性質的にも、機能的にも限りなく近いと思われる。頓知話のうらにあるその何かを検討して、占術の流行と比較する事によって、仏教、殊に禅が江戸時代の庶民に与えた影響を考えたい。しかし、仏教の教理とそのもとにある民衆の観念という上下関係の図式で考えたい訳ではない。『一休ばなし』は何も論じていない。でも、だからこそ他のテキストから見えにくい違う次元の現象を照らす事が出来ると思われる。『一休ばなし』には占いの直接否定はない。だが、エピソードを通して、江戸時代の空気に漂っていた占いの流行とはかなり異なる心性を物語っていると思う。

歌占の系譜—託宣から占いへ—

平野多恵氏（成蹊大学）

『古今集』仮名序に素戔鳴尊が三十一文字の和歌をはじめて詠んだとあるように、和歌の成立には神の存在が深く関わっている。神の託宣歌は院政期頃から資料に多く見られるようになり、『俊頼髓脳』や『袋草紙』といった歌書には神々の託宣歌がまとめて収められる。勅撰和歌集でも『新古今集』以降、神祇部冒頭に神々の託宣歌を集中して載せる例が増えた。院政期には、巫女が求めに応じて神がかりして託宣としての和歌を詠み出す「歌占」も行われていた。『八幡愚童訓』や『古事談』『保元物語』などには、白河院・鳥羽院・後白河院の歌占に関する説話が見える。

『源平盛衰記』巻第七「和歌の徳」にも、和歌の神とされる住吉や玉津嶋の神をはじめ、神々の託宣のことばや夢のお告げの多くが歌で示されているとある。このように、院政期から鎌倉・室町時代を通じて、神の託宣は和歌の形で多く伝えられて重んじられていた。

室町時代には口寄せや占いにも和歌が用いられた。当時の占いと和歌との関連は、謡曲「葵上」「歌占」や御伽草子『花鳥風月』『鶉鷲物語』『鼠の草子』などからも知られる。こうした歌占の伝統は書物としての歌占本に継承された。室町時代の末には阪本龍門文庫蔵『歌占』のような和歌占いの書が作られ、江戸時代中期以降には、さまざまな歌占本が書写されたり、出版されたりするようになった。『天満宮六十四首歌占御鬮抄』（宝暦四（一七五四）年以前刊）、『歌占集』（明和六（一七六九）年写）、『歌占 萩の八重垣』（享和元（一八〇一）年刊）、『清明歌占』（刊年不明）、『歌占図絵』（刊年不明）、『弘法大師 いろは歌占』（刊年不明）などである。こうした江戸の歌占本には、それ以前の託宣歌や歌占の影響が認められる。

本発表では、神の託宣歌や歌占が後代の歌占本にどのように引き継がれたかを明らかにしつつ、歌占という文化の系譜を跡付けたい。